

◆ 巻頭言

女性が活躍できる村づくりをしてきた被災飯館村に
エールをおくる

板本 洋子

東日本大震災から原発事故がおこり、静かな山村が突然の放射能汚染によって全村避難を余儀なくされた福島県飯館村。私がこの村とかわることになったのは、1986年、村の若い男女の自由な学習の場「いいだて夢創塾」に招かれたのが最初である。当時も今も「農村の嫁不足」は全国的課題で、各地でお見合いイベントが盛んだが、飯館村では学びあいの中から「問題は女性を束縛する古い農村の「嫁意識」にあり」との意識共有が生まれた。若い男女のこうした問題意識に、農村に吹く新たな風を感じたことを私は鮮明に覚えている。

このことは、村の若妻たちが「21世紀は、女性も大空を自由に飛ぶ」と村に向けて発したメッセージとなり、1988年、「欧州の旅:若妻の翼」事業につながった。農繁期に若妻が家族や周囲を説得して費用も自己負担で海外視察に出かけるこの事業は、5年間で約100名が参加し、全国の農村女性の生き方に多大な影響を与えた。初回、村外から嫁いだ女性たちの仲間意識を育て、帰国後も彼女たちの自主性を支える相談役として、私は19人の若妻に同行した。村民の意識が変化し、女性が活躍できるようになるには、長い時間と支援が要ると図ったうえでの、村の依頼だった。

女性たちは期待を裏切らず、その後、公選の農業委員、起業者、専門職の資格獲得、職場リーダーと活躍の場を広げていった。家族や夫を味方につけ、彼女たちのユニークなアイデアが村づくりを拓き、私の出る幕などない勢いとなっていった。

しかし、今回の放射能汚染で、“村を守る”と夫は避難を足踏みし、妻はまず健康と命優先で避難を急いだ。同じ“守る”思いが夫婦で行動を異にしたのである。これまで小さな村が挑戦して得てきたものは、住民の意見や思いの違いに折り合いをつけるための長い時間の共有と導き出された“大同団結”であった。未曾有の災害の復興は簡単ではないが、高度な人間関係が紡ぐ世界観を育んできた“飯館村”が復興していくことを願うばかりだ。



PROFILE

板本 洋子
(いたもと ようこ)

茨城県日立市生まれ。1969年、日本青年団協議会へ勤務し青年団活動に従事。1980年、日本青年館事業の一環、結婚相談所設立と同時に専任。84年から所長。退任後(08年～)専門相談員。この間、「地域の結婚・女性・若者」をテーマに講演、ワークショップ「出会い交流会」、関連事業の企画・コーディネーターを務める。著書『追って追われて結婚探し』(新日本出版社2005年)など。